

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 93 号

2015年 6月



第 140 回観察会～斜平山・米沢のスプリングエフェメラル観察会

5月10日(日)に第141回観察会「斜平山・米沢のスプリングエフェメラル観察会」が開催されました。24名の参加者でした。NF(ネイチャーフロント)米沢との共同開催です。NF米沢では昨年より米沢市民への公開観察会として取り組んでおり米沢からは19名の参加者で、総勢43名となりました。キャンプ場分岐で合流昼食することにして高山の原生林を守る会とNF米沢で30分程度の時差を設定して出発しました。

今回は、中の道コースを神明沢まで延長して大森山自然公園に戻る周回コースです。この時期は三又の沢源頭からキャンプ場分岐までオトメエンゴサクの花が斜面一面に広がっているのですが、今年は生物季節が例年より一週間程度早く進んでいるため、オトメエンゴサクは花の時期を過ぎておりました。今回のメインテーマの一つにしていたイワフネタチツボスミレ群落も花を落とし、十分に観察できませんでした。しかし、キャンプ場分岐から先ではカタクリやスミレサイシン、キバナノアマナ、キバナイカリソウなどが見頃で斜平山のスプリングエフェメラルを満喫することができました。また、蝶のスプリングエフェメラルであるヒメギフチョウも姿を見せてくれ、これまでとは趣を異にした斜平山の早春の生命の息吹に接することができました。



残雪周辺のスプリングエフェメラルを観察しました



オオタチツボスマレ



エンレイソウ



カタクリ畑

斜平山のスプリングエフェメラル観察会に参加して

笹木ヨネコ

今回、初めて参加させて頂き、最初の「スプリングエフェメラル」の言葉に疑問？でしたが説明書を見て納得でした。私は山野草が好きで自宅でもいろいろ育てており、とても興味をもって参加させていただきました。歩きはじめて、いろんな春の花が咲いており、花の名前も聞くと、本当に詳しく説明していただき、ルーペで観察され、花の型や生態を教えていただき勉強でした。山を登った中の道のお花畑は見事でした。雄大な中にカタクリ、キクザキイチゲ、アズマイチゲ、オトメエンゴサク等々雪がまだ解けていない中一面に咲いていてびっくりです。

お昼はネイチャーフロント米沢の皆様と一緒に手作りのおいしいお惣菜を頂き、お腹も満足でした。午後はスマレ、キバナノアマナを観察しながら下山です。

私は今回、ユキツバキを見ることができ雪国のため葉が他の椿と違って柔らかい事にびっくりでした。



エゴアオイスミレ



キバナノアマナ



キバナイカリソウ

第139回自然観察会～北霊山・霊山のスプリングエフェメラル観察会 必死に登って、満腹、万福

長岡義人

息はゼイゼイ、心臓バクバクもうダメだ。足が一步も動かない。後ろの女性陣に道を譲り、あとは黙って下を向き自分の足先を見つめるだけだった。だがその時、ある思いが私の空っぽの頭の中を駆け巡った。

それは、三日前の家人との会話で、家人から霊山に花を観に行かないかと呼びかけられたことだった。

「何言っていることやら、高所恐怖症のくせに。以前霊山の断崖絶壁で腰を抜かして、両側から高校生たちに支えられて、やっと崖上の手摺つき歩道を渡ったのを忘れたのか、あの時ここは卒業、もう二度と来ないと泣き言を言ったのは誰だ、それに俺の体力じゃもう山登りは無理。みんなに迷惑をかけるだけだから、行かない」

「それが登山じゃないらしい、山に咲いている花を観ながら、ダラダラと歩くだけらしいよ」と、家人は散歩気分での山



並んで記念撮影

歩きだからと、伊藤みどりさんからお誘いの電話があったことを報せた。

「エッ、ダラダラ歩き？俺ダラダラって言葉大好きだ。」ということでその話を真に受けて参加させていただいた、この度の霊山の山歩きだった。

さて当日は、前日までの曇り空がまるで嘘のような、雲一つない大晴天。小鳥の森公園の駐車場に集合して、3台の車に分乗させていただき、いざ霊山のお花畑へ。途中の里の桜は華やかに咲き誇り、この景色を眺めながら走るだけでも、来た甲斐があるものと思いつつ、車は霊山湧水の里駐車場へ到着した。さあいよいよここから総勢19人のダラダラ歩きのはじまりだ。

今日は半日の行程を一日かけて歩きますとの説明を受けてから、いよいよ観察会開始。皆の楽しそうな花談義を聞きながら、歩を進めたのだが、普段体を鍛えていない自分には十五分もすると、もう結構体に堪えてきた。そんな時に先頭に行く佐藤さんの口から洩れた「まだ登山道の入り口までたどり着いてない」という声が聞こえた。その言葉は自分の行く末の不安を十分に暗示させるものだったが、沢山の花々や木々の解説を聞きながら楽しく歩いている自分にも、また気がついてた。ふと後ろを振りむき遠くを眺めると、左から安達太良山、吾妻山の連なりに続き、その奥遠くに雪を頂いた飯豊連峰、そして右端にチョット蔵王の山が顔を出す大パノラマが、まっ青な朝の空にくっきりと浮かび上がっているのが見えた。思わず深呼吸を二つほどしてまた歩きはじめる。やがて45分も過ぎると、さすが皆の口数も少なくなってきた。そしてこのきついのは自分だけじゃないと思いつつ、もうダメだと追い込まれてくる丁度その頃を、見計らったかのように、先に行った人たちの大きな歓声が聞こえるのである。

その歓声に促されるように、重い足取りを運びながら皆に追いつくと、そこには素晴らしいお花畑が広がっていました。最初はカタクリの群落が斜面一面ばかりでなく、登山道の上にも咲き誇っている。成程これは、感動の声が上がるのも無理はない。アリに運ばれた種子が発芽し、それから6年以上もかかって、今の花を咲かせているようだ。そんなことを知れば道に咲いたカタクリの花をむやみに踏みつけることはできない。疲れを忘れて踏まないようによけながら、注意をして歩いた。

そして2度目の歓声。今度はスハマ草(雪割草の一種)だ。その群生地は登山道からからはずれた奥まった所にあり、そこを知る人の案内がなければ見られない秘密の花園で、スハマ草の小さな白い花が、一面に静かに咲きそろうっていて、大いに得した気持ちになり感動した。そしていよいよ大感激のクライマックス、ハイライトは昼食タイム。松井さんをはじめとして、皆さんからの差し入れのお弁当。ホットドックのパンを始まりに、ピラフ、煮物、漬物等々、最後にケーキや果物のデザートまで次々と現れ、

和食洋食のフルコースのご馳走を頂き、とうとう持参のおにぎりは手つかず持ち帰り、夕食のメインディッシュとなりました。

という訳で帰り道はルンルン気分朝閉じていた花を、大きく開かせたカタクリの花たちに別れの挨拶をして、楽しい山登りを終えました。

楽しい春の一日をありがとうございました。



19人が並んで歩く壮観



胎内をくぐって生まれ変わった？



松井食堂開店



アズマイチゲ



(裏羽は質素でも)ルリシジミ



(春に咲くけど)ナツトウダイ

我が家の自然観察 河上隼治

屋外の自然観察が困難になったので、我が家の庭の観察をしました。

春に先駆けて花をつける「マンサク」が黄色い細長い花を開きました。その名の起源が“まず咲く”とか、枝一杯に咲くことから“満作”に由来しているといわれているので、満開になったらさぞ見事だろうと期待していましたが、花が多くなるにつれ、茶色いがくや花序が成長し全体が枯れたように茶色がかり、咲き始めの黄色い美しさがなくなってしまいました。人間も然り。全て初めが美しい。今年は「マンサク」に限らず花のつきが良いようです。「スギ花粉」も大量に生産されたようで、我が家では私を除いた全員が花粉アレルギーで、毎年春になると、目を真っ赤に充血し、鼻の頭を赤くして、塵籠はティッシュペーパーで溢れます。スギといえば子供の頃、スギ鉄砲を作ったのが思い出されます。「スギの実」を弾とし、押し出し棒は自転車のスポークでした。スギの実を取るときは、大量のスギ花粉を浴びたはずですが、花粉アレルギーの人はだれもいませんでした。

新説(珍説)

昔は洩垂れっごが多かったので、鼻水(青っ洩)が鼻の粘膜をコーティングして鼻からの花粉の進入を防いだのではないかと。

今年も庭木の剪定をしましたら、去年のスズメバチならぬスズメの巣を見つけました。目の高さくらいの枝の二股になったところを土台として、半球形の巣を作っていました。あの小さな嘴で、細い枝を巧みに組み合わせ、名人の組み上げた籐細工を思わせる見事なものでした。遅くなったので明日写真を撮ろうと思っていましたら、明け方に小雨があり、濡れて形の崩れた巣は、だらしなく垂れ下がっていました。

教訓 “今日やろうとしたことは、明日に延ばしてはいけない”

僅かな小雨にも崩れてしまう繊細な巣を、冬の雪と大雨にも耐えるような安全な場所を選ぶ知恵には感嘆せずにはいられませんでした。

春に先駆けて芽を吹くものに「ふきのとう(落の臺)」があります。生垣の下に数個芽を出しました。からあげにしようと思いましたが、数も少なく可哀そうなので今年は見合わせました。そのうち臺が立ち周りに「落の葉」が一面に広がりました。「ふき」と「ふきのとう」との関係を調べたら、「ふき」は「ふきのとう」から伸びた地下茎より葉を根生させるとあり、それなら「ふき」をいくらとっても来年には影響しないな。「ふき」のほろ苦さを味わおうと思っています。

春の味覚として毎年味わう植物に「よもぎ」と「たらめの」天ぷらがあります。「たらめの」は「ふきのとう」と同じく親の株から伸びた地下茎より生えたひこばえで次々と増えていきます。それらを地下茎を含めて切り取り、知人に分けてやりましたら、親幹が枯れてしまいました。一本だけ残った孫幹には芽生える気は見当たりません。大事に育て来年に期待し、今年は「よもぎ」と市販の「まいたけ」の天ぷらで我慢しました。

黄色い「まんサク」に対して真っ白な「ゆきやなぎ」も満開でした。地面に目をやると黄色な「すいせん」が思わぬところに花を咲かせています。植えたわけでもないのに、何で増えたのか。同じ増えたのに「むすかり」があります。紫色の花を、集団で生えている柔らかなところから離れた、こんな所と思わせる硬い地面から生えているのがあります。可憐なスマレも庭のあちこちに咲いています。思わぬところといえば、「さんしょう(山椒)」の木があります。これは小鳥のお土産か。若葉が硬くならないうちに摘み取って今年の「鯨のさんしょう漬」を漬けなければなりません。「こごみ」は葉を広げて食用の時期は過ぎてしまいました。「どうだんつつじ」は真っ白な蕾を今にも開きそうな様子で、これから夏にかけて「わらび」が伸び、「おおてまり」は枝一面に緑の蕾をもち、真っ白な花を咲かせる準備をしておき、「あやめ」や「かんぞう」もそれぞれの花を咲かせることしよう(2015年4月29日)。



満開のまんサク



崩れたスズメの巣



トウが立ったふきのとう



散り始めた雪やなぎ



ドウダンつつじ

今から 30 年ほど前、福島市信夫山の下に住み始めた3月のある日、急にくしゃみが何回も出て、眼がかゆくなり、水のような鼻水がツートと出てきた。あとき、近くの小さな医院に行って診てもらい、おじいさん先生にどうしてこんなことになったのかを尋ねた。そのときに「それは、あなたの体がなまくらになったからです」と言われたのが忘れられない。「なまくら」という言葉は余り聞いた覚えがなかった。辞書で引くと、「鈍(なま)くら」は意気地がなくてなまけものであること。鈍(どん)なこと。また、その人。とあった。切れない刀のことを「鈍刀(なまくらかたな)」という言い方をするらしい。30年経ってもそんな風に言われたのを覚えているのだから、人にもものを言うときは気を付けなければならないと思っている。でも、あの先生の言ったことは本当のことだろう。それ以来ずっと花粉症は続いている。信夫山のスギ花粉は強敵であった。

それでも、年を取るともって鈍(どん)になるのか、症状は軽減されている気がする。若い頃は薬を飲んでいても微熱が出て具合が悪かった。今は、3月に薬をもらい、マスクをしているとそうひどくならずにご過せるようになった。マスクの性能が良くなったのかもしれない。毎年のことだから、かかりつけの町内の医院に行くと受付の人から「いつもの薬でイイですか。目薬は何本ほしいですか？」と言われ、待ち時間もなく帰ることができる。診察はない。見ていると次から次に花粉症らしい人が入ってきて、いつもの薬というのをもらっていた。新地町もスギの木は沢山ある。鹿狼山の麓はスギ林に囲まれ、風が吹くと黄色の花粉が舞い上がるのが見える。大方は手入れされず放置されたままのスギ林である。自然林を伐採し軒並みスギ林にしてしまった行政に腹が立つ。何とかしてもらいたいものだ。

さて、今年3月、岩手県西和賀町に友人を訪問し、サクラバハノキという稀少な樹木を観察した。雪が沢山あって地面は見えなかったが、湿地なのだろうか普通のハノキも沢山植生していた。ルーペで雄花や雌花を観察していたら、とたんにくしゃみが何回も出て、鼻水も出てきたので慌ててマスクをした。どうやらハノキの花粉もアレルギーであるらしかった。私はくしゃみを数多くすると、頭痛がしてくる。用心してザックにマスクを入れておいて良かった。

スギ花粉症になると、その後が続くヒノキの花粉もアレルギーになるそうだ。そういえば花粉症である期間が長くなってきた気がする。いつもは5月の連休が終わると、嘘のようにすっきりしていたが、今年は6月になっても何となく鼻がむずむずするようだ。

ハノキの事があってから、自分にはもって他にアレルギーになっている植物があるのではないかと思うようになった。今、思い当たるのは、休耕田で繁茂しているイネ科の植物である。

私は南相馬市に勤務している。毎日30kmの道のりを車で1時間ほど運転して職場に通っている。震災後、トラックや、除染関係の車両が増え、ノロノロ運転だ。車窓から風景を眺めながら走っている。自宅回りは休耕田もあるが大方の田んぼは苗が植えられ、あぜ道は草が刈られ、手入れされている。しかし、だんだん南に行くにつれて休耕田が多くなり、南相馬市原町区に入ると、田んぼはほとんど、雑草の生い茂る原っぱと化している。休耕田というよりも、放射能汚染による「止耕田」と言ったほうがいいのかも。この土地は将来的に耕される見込みはないのだろうか。原っぱには所々広い宅地にいぐねが回され、納屋と母屋が別々の大きな家が建っている。おそらく昔からの農家であったろう。田畑を耕して生活していた人々の事を考えると暗然とした気持ちになる。

この広い原っぱには、それこそ一分の隙もなくびっしりと雑草が生い茂っている。イネ科ではカモガヤ、エノコログサ、ズズメノテッポウ、ネズミムギなど、キク科ではヨモギ、ハルジオンなどが目立っている。その他、スイバやヘラオオバコ、カヤツリグサも生えている。調べてみたらカモガヤやネズミムギなどはイネ科の代表的なアレルギーだった。

同僚の一人も5月6月は眼がかゆいし鼻詰まりがひどいと言っていた。私は3月のスギ花粉症ほどではないが、鼻がむずむずするから、カモガヤの花粉にでも反応しているのだろう。

なまくらな体はますますなまくらになり、これからどうなることやら分からない。いつでもどこでもマスクが取り出せるようにしておかなければならない。(2015/06/09 記)



南相馬市の田んぼは雑草の原っぱと化している

「大震災が教えてくれたもの」(14)

2030年の電源構成

奥田 博

今から15年後2030年の電源構成が有識者会議から答申を受け政府案が決定した。以下、読売新聞から。

太陽光や風力などの再生可能エネルギーを現在の2倍以上に増やす一方、東日本大震災前に約3割だった原子力の依存度を引き下げ、再生エネを下回る水準にした。政府の今後のエネルギー政策の基本方針になる。

具体的な比率は、▽再生エネ=22~24%▽原子力=20~22%▽天然ガス火力=27%▽石炭火力=26%▽石油火力=3%——など。また、比較的安い費用で安定的に発電できるベースロード電源（石炭火力、原子力、水力、地熱）の割合を、今の40%程度から、56%程度に引き上げるとしている。

比率は4月の有識者会議案と同じだが、文言について、政府案では、原子力発電所の再稼働で「国も前面に立ち、立地自治体など関係者の理解と協力を得るよう取り組む」ことを新たに加えた。再生エネについては、「最大限の導入拡大と国民負担抑制の両立」が必要だとしている。

一方、人口は現在の1億2800万人をピークに減り始め、2030年には1億1600万人と10%近く減少し、2050年前に1億人を切る。すなわち原発を使わなくても人口減によって、脱原発をはかることは十分に可能なのだ。原発の現状はゼロである。福島第一原発事故への反省をもとに改定した原子炉等規制法で、原発の寿命は40年に制限されている。これに従えば30年度の原発比率は15%以下にしかならず、原発を20%以上にするには法律の例外規定を援用、すなわち40年制限を延長するしかない。構成案は、無理をして原発の比率を増やしていくことを意味する。朝日新聞は「原発回帰」とまで表現している。

安倍さんが言ってきた「原発への依存度を可能な限り低減する」はポーズであったのか。ポーズでないなら自分の意志で15年後の未来図に盛り込むべきだ。7月にも政府案として決める予定だが、その前にパブリックコメントにかける。この未来図でいいのか。改めて考える機会である。

電源構成は、不測の事態で電気が供給できない事態にならないよう、あらかじめ電気の賄い方を考えておく目標値のようなものだ。再エネ22~24%という目標は非常に高い。再エネの課題克服に向けた施策が次々に打ち出した方が、雇用も増え、経済成長も見込める。原発回帰が新しい成長の芽を摘みかねない。電気の自由化を機に、再エネを軸にしたエネルギー産業への参入を考える企業や地域経済の核にしようという自治体も増えている。

最近、東京でも福島でも感じるのだが、震災直後の省エネ・節電は影を潜めている。原発事故は過去のもので、今は何もなかったようにも感じる。福島の地方紙では相変わらず原発関連記事が毎日掲載されているが、中央紙にはたまに掲載される程度で、その頻度は極端に少ない。「原発事故は過去のもの」という意識こそがもっとも怖い。政治も原発は争点にならず、再稼働も易々と通る。気付けば原発事故前と何ら変わっていない状況こそが、今の政権の思うつぼだ。風化は後退だ。



除染袋で満たされたゾーンと新規ゾーン



葎に覆われた常磐線と空の送電線

アワブキ (*Meliosma myriantha* アワブキ科アワブキ属)

コナラ林からミズナラ林にかけて植生する落葉高木。岩が散在する半陰性の湿気のたまる場所に多く、同様の環境を好むケヤキ林に多い。スミナガシ、アオバセセリの食草植物である。多くの樹木は春の発芽後枝を伸ばした後は、新梢の生長活動は休止するが、アワブキは、夏に発芽し新梢生長活動を行う二次伸長をしやすいため初夏から秋にかけては、成葉と若い葉が混在する。スミナガシは成葉を食べ、アオバセセリは若葉を食べるため幼虫の棲み分けが成立している。また、オオカメノキ、ムラサキシキブ同様冬芽は鱗片を持たない裸芽であるが、吾妻・安達太良連峰での植生は少ない。恐らく二次伸長した枝は冬の寒さに耐えられるだけの養分の蓄積が少なく多雪地帯では凍害を受けやすいためではないかと考えられる。枝、芽、花序、葉の裏面に黄褐色の毛がある。特に若木では主幹の駱駝色が目立つ。



葉は互生である。葉は紙質で薄く、長楕円形または倒長楕円形、先端は短く尖る。葉身には多数の並行脈が走る。葉縁には鋸歯がある。葉の裏面には褐色～黄褐色の短毛が着生する。シデ類やナラ、クリ類などの並行脈が目立つ樹木の葉より数倍大型の葉であり、夏であれば葉でアワブキを識別することは容易である。しかし、春の発芽間もない時期は黄緑の透明感のある葉がカタバミの葉の様に葉が閉じた状態であり、クリと混同しやすい。

花は頂性である。枝の先端に大型の円錐花序を着生する。小花の花弁は蕾の時期はクリーム色であるが開花すると白色となる。花は5数性で花弁、雄しべ共に5個あるが、2枚の花弁は線状であるため花弁は3枚に見える。面白いことに雄しべは線状の花弁内側の2本だけがオレンジ色の葯を持つが、残りの3本は鱗片状に退化していて、まるで花弁と雄しべが少ない養分を分け合ってお互いの機能を確保しているようである。開花すると花序全体から甘い香りが漂う。

高山の植生調査を始めた頃に、ケヤキの大木の脇に未開花の花序を1花だけ着けたアワブキの古木を見つけた。ここ以外ではアワブキとの再会はなかったが、県南方面に登山に行く途中で偶然万冠の花を着けたアワブキに遭遇し、驚いた。これが、本来の花の時期のアワブキの姿であると納得するまでには更に10年を要することとなった。

ムラサキシキブ (*Callicarpa japonica* シソ科ムラサキシキブ属)

コナラ林からミズナラ林にかけての比較的日当たりの良い林縁、林内に生育する落葉低木。伐採跡地や山火事跡地に形成された二次林に多く植生する。これは、ムラサキシキブの埋土種子は発芽能力を長く保持する性質を持つためと考えられる。冬芽はアワブキやクサギ、オオカメノキと同じく裸芽で、星状毛が密生する。

葉は対生である。葉は紙質で薄く、長楕円形で先端は細く流れ尖る。葉の基部も同様に緩やかに細く流れ、ごく短い葉柄に繋がる。葉縁は葉幅の最も広い中央部を中心に粗い鋸歯がある。葉の基部の葉縁は滑らかである。葉身には並行脈が走る。葉裏には淡黄色の腺点が多い。開花期のムラサキシキブの葉を観察すると所々で穴の開いた葉をよく見かける。これはイチモンジカメノコハムシというムラサキシキブを食草とする昆虫の仕業である。



花は腋性である。葉柄の脇から比較的長い花柄を伸ばしその先が2分岐し更に1と3花を単位とする花序群に分かれる。小花は合弁花で花冠の先端は4つに平開する。花冠は腺毛に被われている。雄しべは4本あり、先端に黄色の葯を着ける。花糸は透明感のある紫色である。雌しべ先端の柱頭は2つに分かれる。開花すると雄しべ、雌しべ共に花冠から長く突き出る。成熟した葯の先端は口が開き(孔開と言います)花粉を飛ばす。受粉を終えた柱頭はほんのりと黄色みを帯びる。紫色の花冠と花糸、黄色い葯そして長く伸びた白い雌しべが繊りなす小花の姿は優雅で気品がある。ムラサキシキブの属名 *Callicarpa* は美しい果実を意味するが、花も実に劣らず十分に美しい。

1997年7月19日に高山で初めてムラサキシキブの花を見た。山岳で紫色をした花をもつ樹木に遭遇したのは初めてで、何かとても貴重なものを見つけた気持ちになったのを覚えている。秋の美しい果実ははともかくとして、花の方はすっかりご無沙汰していた。ムラサキシキブはコナラ林に普通に植生する樹木であり、分布域は標高差で約600mに亘る。また樹単位としては開花期間が長いタイプであるので、その美しい花を堪能できる期間は長い。

西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア(NF 米沢と共同:詳細は佐藤守まで)

今回はデコ平湿原駐車場から湿原を經由して西大巔に登り、西大巔山頂から2班に分かれて作業を行います。西吾妻小屋にてNF米沢と置賜森林管理署員と合流し、7月に予定されている現地説明会について協議を行います。

1. 実施日:6月27日(土)5時30分～17時30分(雨天時6月28日に順延)
2. 定員 :8名(山岳での行動において自己管理のできる方)
3. 内容 :西大巔水場周辺(Aコース:4名)と樹林帯～西吾妻小屋の湿地帯(Bコース:4名)の誘導ロープの設置作業を行います。
4. 集合場所・時間:四季の里正面入り口駐車場 5時30分
5. 参加費 :0円
6. 申し込み:佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメール(全員返信モード)にてお願いします。(電話申込は午後7時～9時でお願いします)

第141回自然観察会案内:安達太良・烏川遊歩道河辺林の植物観察会

日時:2015年7月12日(日)7:30～16:30

集合場所 四季の里正面入り口駐車場(あづま公園橋側) 7:30 参加定員 20名

内容 奥岳スキー場から安達太良山頂を源とする烏川に沿って整備された遊歩道を辿り、河辺林に植生する植物を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用:保険代(500円)

申し込み:7月11日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

第96回 「ふくしま復興支援フォーラム」

日時 2015年7月22日(水) 18時30分～20時30分

報告 佐藤 守 (高山の原生林を守る会代表)

テーマ 「放射能汚染と樹園地および山岳生態系

～山岳愛好家・果樹研究者として係った東京電力福島第一原発事故」

県職員として果樹研究者として山岳愛好家としてこれまで放射能汚染対策研究に係る中で経験した様々なエピソードと人間について紹介し、農地と山岳の自然生態系の復興の在り方について参加者のみなさんと考えていきたいと思えます。

会場 福島市アクティブシニアセンター「AOZ(アオウゼ)」 視聴覚室
MAX ふくしま 4F(福島市曾根田町1-18)

福島復興支援フォーラムについて[発足:2011年、事務局:今野順夫(KonnoToshio)]

福島の人々の健康と福島の大地を蝕み続けている放射能汚染から復興のための課題は多面にわたり、かつ錯綜しており、それらの解決無しには復興に向けての歩を進めることが困難な状況に直面しております。

各分野の現場の状況を、地元の専門家にお話しただいて、情報を共有し、将来の復興を見通しながら、当面するこの困難な課題に対して、幅広い観点から自由な意見を交換しあい、一つ一つ問題を解きほぐし、一致点を模索し復興に向けた市民レベルの協働を目指しています。

HP: <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html>

新年度の会費納入をお願いします:郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第93号 2015年6月発行

編集・発行:高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先:佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替:02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法:年会費(500円)を添えて上記まで

編集:佐藤・奥田・鈴木